

# ガリシア語 Ourense 方言の特徴について

Sobre os caracteres do dialecto ourensán

北村 一 親

Kazuchika KITAMURA

## 0. 序

ガリシア語 Ourense 方言はスペインのガリシア地方 Ourense 県において話される言葉であり、その大部分は中部方言に属する。(方言区分については後述する。)

本稿は筆者が Ourense 県出身の 5 名のインフォーマントを調査した結果に基づいて Ourense 方言の特徴をまとめたものであり、第 25 回日本ロマンス語学会(1988 年 5 月 28 日, 名古屋)において「ガリシア語の子音の分析」と題した発表の前半部分に当たる。なおこの発表の後半部分の音声資料をもとに行なった音韻分析に関しては北村(近刊)を参照されたい。

インフォーマント調査に際し、筆舌に尽くし難い御助力を賜った愛知県立大学の C. Paz Prieto Nogueira 先生を初めとして Xosé Barreiros 氏, Luís Losada 氏, Antonio Canle 氏, Carmen Blanco 女史、および Benxamin Rocha 氏に心から感謝の意を表したい。

語彙の意味などはスペイン語で ' ' の中に示しておいた。

## 1. インフォーマント

インフォーマントとして Ourense 県出身の 5 名を調査し、その内訳は男性 3 名、女性 2 名である。以後ローマン・アルファベットの太文字で示す。

### インフォーマント A

Ourense 県の Ceboliños 出身。1955 年生まれ。男性。9 歳以後は Ourense 市街へ。職業は教師。両親、配偶者はすべて Ourense 出身。

### インフォーマント B

Ourense 市街出身。1957 年生れ。男性。Ourense から Santiago de Compostela へ。職業は教師。父親は Ourense, 母親は Cuba, 配偶者は Pontevedra 出身。

### インフォーマント C

Ourense 県 Viana do Bolo 出身。女性。生後すぐに Carballiño へ。両親は共に Ourense 出身

### インフォーマント D

Ourense 県 Banga (Carballiño) 出身。1932 年生まれ。男性。両親・配偶者すべて Carballiño 出身。

### インフォーマント E

Ourense県Villamarín出身。1956年生まれ。女性。両親は共にVillamarín出身。

## 2. ガリシア語の方言と共通語

García de Diego([1909]:155-57)はガリシア語内に方言を認めず、ガリシア語が色々な地域で呈する差異は甚しいものではなく、語彙の用法も強端に混乱していると結論を下した。García de Diego(1959:129-32)においてもほとんど同じ文章で再説している。しかし当時は各地の方言のデータが揃っておらず、方言区分を問題にするのには不十分であったと筆者は考えている。García de Diegoの時代より少し前になるが、Xan Antonio Saco e Arceが北部方言と南部方言に分けた<sup>#1</sup>のも方言研究の未熟さを証明している。

その後各地の方言が多くの学者や研究者によって調査されるに従い、ガリシア語の方言区分ないし方言分布の様相が明らかになってきた。Carballo Caleroは次の9つの音声および形態の指標でガリシア語の方言を分類した。<sup>#2</sup>

1. -ANUに由来する語尾の形態.
2. -ANAに由来する語尾の形態.
3. -nで終わる語の複数形態.
4. -lで終わる多音節語の複数形態.
5. -INUに由来する指小辞の形態.
6. /s/の実現が舌尖調音 [s̺]か舌背調音 [s̠]かの区別.
7. 語中でceceoかseseoかの区別.
8. 語末でceceoかseseoかの区別.
9. gheadaかgueadaかの区別.

そしてこれらを基準に次の表に示すような4つの方言を区別した。ここではA,B,C,Dはそれぞれ南西方言、北西方言、中部方言、東部方言を表わす。(表はCarballo Calero(1971:224)より。)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A	irmán	irmán	cans	animás	paxariño	[s]	mosa	lus	aghulla
B	irmá	irmá	cas	animás	paxariño	[s̺]	moza	lus	aghulla.
C	irmao	irmá	cas	animás	paxariño	[s̺]	moza	luz	agulla
D	irmao	irmá	cais	animás (sic)	paxarín	[s̺]	moza	luz	agulla

この表からも判るように北西方言が最も改新的で東部方言が一番古風である。

これらの方言を基盤として共通語が作られるわけであり、Carballo Caleroが考えた共通語とは音声的には中部方言、形態的には南西方言を採用し、gheadaやseseoを認めず、-ANUに由来する語尾は南

西方言の-án,-ANAに由来する語尾はそれ以外の方言の-á,そしてlで終わる多音節語の複数形は東部方言を採用するという折衷的な組合せである。<sup>#3</sup>この点に関しては池上岑夫先生の『ポルトガル語とガリシア語—その成立と展開—』が類書に比べ最も詳しく説明されている。<sup>#4</sup>

ちなみにFernández Rei(1982)は78の音声および形態の特徴からガリシア語の方言を分類した。下位方言の区分は詳しくなったが結果としてCarballo Caleroによる分類と大差なく、西部・中部・東部の3つのブロックに大別している。

### 3. インフォーマントの方言特徴

Carballo Caleroの9つの指標とllの発音の区別(lleísmo~yeísmo)の合わせて10の指標で各インフォーマントの方言特徴を分析したものが次の表である。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
A	irmao	irmá	cans	animais	paxariño	{s}	moza	luz	arulla	{d <sub>3</sub> }
B	irmau	irmá	cans	animais	paxariño	{s}	moza	luz	achulla	{i}
C	irmau	irmá	cas	(animais)	paxariño	{s}	moza	luz	arulla	{d <sub>3</sub> }
D	irmao	irmá	cas	animais	paxariño	{s}	moza	luz	arulla	{r}
E	irmau	irmá	cas	animais	paxariño	{s}	moza	luz	arulla	{d <sub>3</sub> }

この表の中でインフォーマントCの4番めの指標が括弧に入っているのは、この単語自体はanimalesと答えたがvocais : vocalなどの他の例からanimais型であると筆者が判断したからである。

#### 3. 1. -ANUに由来する語尾の形態

インフォーマントAとDは-aoで、他はすべてその変異形の-auである。NOM43では-ánを規範としているけれどもlancarao, limiao, mariñao, meiraoなどの-aoの地域特有の語も認めている。古くはLugris Freire(1931:16)も castelao < Castela, ourensau < Ourenseなどを認めているし、Valladaresの辞書にも chan 'llano' DGC147b, man 'mano' (ただし古語) 363b, hirman 'hermano, -a' 323aと共に chau 'suelo' 149b, mao 'mano' 368b, mau 'mano' 372b, hirmau 'hermano' 323aが記録されている。-ao型と-án型の分布はZamora Vicente(1953:75)にある図を参照。

#### 3. 2. -nで終わる語の複数形態

インフォーマントAとBは-nsであるが他はすべてnが落ちた-sである。NOM51において-nsが規範とされている。ただしインフォーマントBの-nsは移住したSantiago de CompostelaかPontevedra出身の配偶者の影響も大いに考えられる。nが落ちた-sの形は中部方言(および北西方言)のものでcães(15世紀まで) > caas > casと変化した。Lugris Freire(1931:24)では上記の2通りの複数形が対等に記述されている。

-ns型が規範となった理由としてその話し手の数が多いということの他にRosalia de Castro(Santiago), Eduardo Pondal Abente(A CruñaのPonteceso), Ramón Cabanillas Enriquez(Pontevedra)の

Cambados), Alfonso Rodríguez Castelao(A CruñaのRianxo), Luís Amado Carballo(Pontevedra), Manuel Antonio Pérez Sánchez(A CruñaのRianxo)といった文学的伝統もあげられる。<sup>#5</sup>

Carré Aldaoの選文集より例を拾う。

Rosalía de Castro; sons, LG330. Pondal; corazons, LG426, ilusions, *ibid.*

### 3. 3. -lで終わる多音節語の複数形態

全員がlをiに変えてsを付けた形を用いる。しかしこの-is型はガリシア東端部の古風な形であるにもかかわらず現代のガリシア語全体に普及した点は注目に値する。García de Diego([1909]:89)は現代語においてlを消去してsを付けた-s型がふつうで (animás, papés)-is型はほとんど使わないことを示しているし、Lugris Freire(1931:23-24)も al, el, ilで終る語はlを消去してsを付け (reás, papés, cadris) olで終わる語はesを付ける (tirizoles)と説明している。一方、共通ガリシア語の規範は-is型であり (NO M52), その採用の理由として-s型よりも生産的であり、最近のガリシア語で書かれたものに多用されること、さらにlcesを付けたものよりも伝統的であることがあげられる。<sup>#6</sup>

インフォーマントCはanimalの複数形にanimalesという形で答えた。(インフォーマントCを-is型に分類した経緯は前述した。) -les型の複数形には起源が2種類考えられる。一方はカスティーリャ語法であり、もう一方はスペイン国境に近いポルトガルのTrásos Montesの方言にも見られる形態である。<sup>#7</sup> ただし後者においてはカスティーリャ方言などの影響という点からも改めて考える必要がある。

### 3. 4. Gheada

インフォーマントA, C, DそしてEの有声軟口蓋閉鎖音 [g]に対してインフォーマントBは無声軟口蓋摩擦音[x]を有する。いわゆるgheadaと呼ばれる現象である。Zamora Vicente(1952:59)の地図を見るとA Cruña県とPontevedra県の全域とOurense県の西部およびAncares渓谷がgheadaの地域となっている。Lugo県のgheadaの分布を調べたMaría del Pilar Santamaría SandeによるとZamora Vicenteによる結果よりさらに広がっているという。<sup>#8</sup> 筆者はそれ以後の新しい資料を只今検討中であるのでこの問題に関する分析は別の機会に譲ることにする。

### 3. 5. Yeísmo

口蓋化側音 [ʎ] を硬口蓋摩擦音 [j] で発音することをyeísmoと呼ぶ。これはさらに破擦音 [dʒ] にまで発達することも少なくない。インフォーマントDは口蓋化側音を保っているのに対し、インフォーマントBは硬口蓋摩擦音を、インフォーマントA, CおよびEは破擦音を有する。Yeísmoは子音体系の再編成という点で重要な鍵となる。すなわち最も古い体系であるインフォーマントDの子音体系は側音と歯鼻音において口蓋化の相関と鼻音の相関で固く結ばれていたのであるが、インフォーマントA, CおよびEのようにyeísmoによって破擦音にまで到達すると今までの相関が崩れるかわりに閉鎖音、破擦音、摩擦音、鼻音というより大きな枠組においてはほぼ完全な均整のとれた子音体系が再編されたのである。この点に関しては北村(近刊)に述べておいた。

#### 4. 軟口蓋鼻音 [ŋ]

軟口蓋鼻音はガリシア語領域の全域で見られる音でありOurense方言特有のものではないが、今回の分析で非常に興味深い事実が判明したので取り上げることとする。

ガリシア語では語末のnや語中のnhやnで終わる動詞が前接語の代名詞o, a, os, asを後続させる時のnや接頭辞inが母音で始まる語を後続させる時のnなどは軟口蓋鼻音である。(英語などのように軟口蓋子音の前のnも同様である。)

従来は軟口蓋鼻音の後で音節が切れ、よって軟口蓋子音は内破であると言われてきた。たしかにゆっくりした発音ではそのように実現されるが、ふつうの発話では軟口蓋鼻音は外破音となり、後続母音と密接に結びつくことを筆者は今回の調査で観察した。<sup>註9</sup> 他の鼻子音との分布は次のようになる。

#-	V-V	-#
m	m	
n	n	
( ɲ )	ɲ	
	ŋ	ŋ

括弧内の音はあまり現われないことを示す。母音間では結局、/m, n, ñ, ŋ/が対立することになる。

Leite de Vasconcellosが記録したガリシア語のXan ŋ Antonio 'Juan Antonio' も外破音を示したものであろう。(Vasconcellos(1929:665)).

この軟口蓋鼻音が出わりにepéntesis発達させてngになった例がある。Valladaresは 'añadir' の意味でenader, enadir, DGC 194 a と engader, engadir, DGC 199 a を記録している。(前二者の意味は正確には 'añadir en todas sus acepciones').これらは明らかに二重語であり、語源はIN+ADDEREである。スペインのAsturias地方で話されるガリシア語においてD. Alonso(1954:209)はSeares, Santa Euralia de Oscos, San Martín de Oscos, Prádeasでengalar 'volar' を、そしてLa Caridad, Rozadas, Andrésでenalar 'volar', さらに上記のSanta Euralia de Oscosで egalar 'volar' をも記録した。同じくAsturias地方のガリシア語においてAcevedoとFernándezはangoites 'ayer' VBO15(A), anhoite 'ayer' *ibid.* (F) El Franco, Boal, そして前者の派生語antangoite 'anteayer' VBO16(A) Coañaを記録した。Ancares溪谷においてもLa Fornelaでanueite 'anoche' とagueite 'ayer' が観察されている。(D. Alonso y García Yebra(1972:342)).

軟口蓋鼻音 [ŋ] はガリシア語と平行して他のロマンス諸語にも見られる。ガリシア地方に隣接するポルトガル北部Trás-os-Montes地方のDeilãoやPetisqueira<sup>註10</sup> で軟口蓋鼻音が記述されている。これらの方言はガリシア・ポルトガル語から分化した方言、すなわちco-dialectoであり、<sup>註11</sup> ガリシア語やRio de Onor方言, Guadramil方言Miranda方言と同じ関係にある。<sup>註12</sup> Vasconcellos(1985:153)は軟口蓋鼻音を母音連続を避けるための子音として扱っている。Santos(1967:214, 427)も同じ説明をしており、PetisqueiraとDeilãoで次の語を記録している。(Ibid., 210).

ūṅa 'una', rāṅa 'rana', masāṅa 'manzana', lāṅa 'lana',  
masāṅaira 'manzano', ṣtā ṅ a bir 'estan a venir'.

散発的にLombada地方の方言やMiranda方言で鼻母音で終わる語と母音で始まる語の間に軟口蓋鼻音が弱く聞こえるという。(Idid.).

ṣā<sup>n</sup> amiṅuṣ 'son amigos' (Rio de Onor), bā<sup>n</sup> ali 'van  
allí' (Quintanilha), ṣā<sup>n</sup> oṛas 'son horas' (Constantim).

軟口蓋鼻音の前の母音が鼻音化されているのもガリシア語と同じである。(García de Diego ([1909]: 10), Carballo Calero (1979: 127, 136)). Miranda方言はポルトガル語よりもガリシア語と著しい共通点が見られるのである。

他のロマンス諸語でガリシア語との接触がない地域でも類似の発達が見られる。プロヴァンス語のGascogne方言においてRohlf's (1970: 156)は次の語を記録した。

lang 'lana' (Landes, Val d'Aran), arràng 'rana' (Landes),  
auràng 'avellana' (Armagnac) < ABELLĀNA (REW17), pousoùṅ  
'ponzoña' (Sauveterre-de-Béarn), mouling 'molino'  
(Sauveterre-de-Béarn).

イタリア語の諸方言でも語中のnが軟口蓋鼻音に変化した例が見られる。<sup>13</sup>

CATĒNA > kadèṅna, LĀNA > laṅna, FONTĀNA > funtaṅna, LŪNA  
> lūṅna, CŪNA > kūṅna (Noli, Vicoforte, Cortemilia,  
Mombaruzzo), laṅna, kadèṅna, kōṅna (Bardi), VĒNA > vaṅna,  
GALLĪNA > gaḷeṅna, CORŌNA > kuraṅna, PERSŌNA > parsayṅna,  
LŪNA > loṅna, CŪNA > koṅna, FORTŪNA > furtoṅna (Bologna),

kadèŋa, laŋa, kūŋa, lūŋa, funtaŋa (Liguria, Piemonte).

語末に軟口蓋鼻音を有する形もイタリア語諸方言に見られる。<sup>#14</sup>

LĪNUM > liŋ (Liguria, Piemonte), CANIS > kaŋ (Fosdinovo,  
Minucciano), MANUS > maŋ (Fosdinovo).

## 5. 結論

以上、5人のインフォーマントが有するガリシア語Ourense方言の特徴を音韻・形態の面から見てきた。最後に各インフォーマントの音韻分析を行った結果から得られた子音体系をあげておく。(音韻分析の詳細は北村(近刊)にまとめておいた。)

### A-C-E

p	t	č	k
b	d	ǰ	g
f	θ s	š	
m	n	ñ	ŋ
l	r	ř	

B

p t k

b d

f θ s š x

m n ñ ŋ

l r r̄

D

p t k

b d g

f θ s š

m n ñ ŋ

l λ

r r̄

< 注 >

1. Carballo Calero(1971:218-19)所引|.
2. *Ibid.*, 223-25, Carballo Calero(1979:80-83).
3. *Ibid.*, 83-84
4. 池上(1984:183-88).なお同書にはガリシア・ポルトガル語の歴史の流れが手際良くまとめられている。
5. [Instituto da Lingua Galega](1980:29, n.1).なお作家の出生地に関してはFernández del Riego(1984)による。
6. [Instituto da Lingua Galega](1980:30および30, n.5).
7. Santos(1967:223).
8. Carballo Calero(1971:229)所引|.
9. インフォーマントから得られたデータなどの詳細は北村(近刊)にまとめておいた。
10. Deilão方言についてはVasconcellos(1901a:49-50), Petisqueira方言については*ibid.*, 50を参照。また両方言についてSantos(1967:138-39)も参照。
11. Vasconcellos(1901b:28).
12. *Ibid.*, 30.
13. Rohlf(1949:370).Belogna方言についてはCoco(1970:62).なお後者の表記法は一部改めた。
14. Rohlf(1949:493-94).

< 略語一覧 >

特に注記のない場合は頁数で引用。

DGC=Valladares(1884).

LG=Carré Aldao(1911).

NOM=Real Academia Galega e Instituto da  
Lingua Galega(1983).

REW=Meyer-Lübke(1968).番号で引用。

VBO=Acevedo y Fernández(1932).AはAcevedoによる収録, FはFernándezによる収録を示す。本書はその書名からスペイン語Asturias方言の記録と間違えられるが、実際にはAsturias方言とガリシア語との推移的言語を記録したものである。

< 参考文献 >

Acevedo y Huelves, Bernardo y Marcelino Fernández y Fernández(1932)*Vocabulario del bable de occidente*.Madrid:Aguirre.

Alonso, Dámaso(1954)“Gallego-asturiano“engalar”‘volar’ —Casos y resultados de velarización de -N- en el dominio gallego,” en *Homenaje a Fritz Krüger*, II.Mendoza:Universidad Nacional de Cuyo, 209-15.

—y Valentin Garcia Yebra(1972)“El gallego-leonés de Ancares y su interés para la dialectología

- portuguesa," en *Obras completas* [de D. Alonso], I. Madrid: Gredos, 315-57.
- Carballo Calero, Ricardo (1971) *Sobre lingua e literatura galega*. Vigo: Galaxia.
- (1979) *Gramática elemental del gallego común*. Vigo: Galaxia, séptima ed.
- Carré Aldao, Eugenio (1911) *Literatura gallega*. Barcelona: Maucci, segunda ed.
- Coco, Francesco (1970) *Il dialetto di Bologna*. Bologna: Forni.
- Fernández del Riego, Francisco (1984) *Historia da literatura*. Vigo: Galaxia.
- Fernández Rei, Francisco (1982) "Bloques e áreas lingüísticas do galego moderno," *Grial*, 77, 257-96.
- García de Diego, Vicente ([1909]) *Elementos de gramática histórica gallega*. (Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela, reimpresión, 1984.)
- (1959) *Manual de dialectología española*. Madrid: Cultura Hispánica, segunda ed.
- 池上峯夫 (1984) 『ポルトガル語とガリシア語—その成立と展開—』東京: 大学書林.
- [Instituto da Lingua Galega] (1980) *Bases pra unificación das normas lingüísticas do galego*. Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela, segunda ed.
- 北村一親 (近刊) 「ガリシア語音韻論の諸問題」『名古屋大学言語学論集』4 (1988年12月刊行予定)
- Lugris Freire, M. (1931) *Gramática do idioma galego*. A Cruña: Moret, segunda ed.
- Meyer-Lübke, W. (1968) *Romanisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter, vierte Aufl.
- Real Academia Galega e Instituto da Lingua Galega (1983) *Normas ortográficas e morfolóxicas do idioma galego*. [s.l.], terceira ed.
- Rohlf, Gerhard (1949) *Historische Grammatik der italienischen Sprache und ihrer Mundarten*, I. Bern: Francke.
- (1970) *Le Gascon: Études de philologie pyrénéenne*. Max Niemeyer: Tübingen, Pau: Marrimpouey Jeune, deuxième éd.
- Santos, Maria José de Moura (1967) *Os falares fronteiriços de Trás-os-Montes*. Coimbra: Universidade de Coimbra.
- Valladares Nuñez<sup>[sic]</sup>, Marcial (1884) *Diccionario gallego-castellano*. Santiago [de Compostela]: Seminario Consiliar Central.
- Vasconcellos, J. Leite de (1901a) *Estudos de philologia mirandesa*, II. Lisboa: Imprensa Nacional.
- (1901b) *Esquisse d'une dialectologie portugaise*. Paris et Lisboa: Aillaud.
- (1929) "Galego," em *Opúsculos*, IV. Coimbra: Imprensa da Universidade, 621-69.
- (1985) "Dialecto transmontano," em *Opúsculos*, VI. [s.l.]: Imprensa Nacional, 1-212.
- Zamora Vicente, A. (1952) "La frontera de la geada," en *Homenaje a Fritz Krüger*, I. Mendoza: Universidad Nacional de Cuyo, 57-72.
- (1953) "De geografia dialectal: -ao, -an en gallego." *Nueva revista de filología hispánica*, VII, 73-80.